

## JCHO湯布院病院 地域協議会議事録

開催日時 平成29年3月2日（水） 18時27分より19時46分

開催会場 JCHO湯布院病院 2階 第1・2会議室

出席者 外部委員 10名

大分郡市医師会副会長 岩男裕二郎、大分県中部保健所長 安達国良  
由布市健康増進課長 田中稔哉、由布市福祉課長 漆間尚人  
日野病院院長 日野修一郎、吉村歯科名誉院長 吉村幸治  
湯布院町民生委員 荻孝良、湯布院町自治委員 後藤久生  
患者代表 佐藤春世、患者代表 佐藤晶

院内委員 4名

院長 根橋良雄、事務部長 細田 毅、看護部長 内田郁美  
地域連携室長 佐藤 史

### 議事内容

（細田事務部長）

臨時協議会開催からの持ち越しであります体育館とプールの閉鎖に関してでございますのでよろしくお願いいたします。

（根橋院長）

前回の議題の健康増進センター“げんき”についてのお話を引続き議題としていきたいと思っております。

委員の方々から意見を頂戴したいと存じます。

（委員①）

私は、市民の皆さんが署名してくれたことに対して自分自身の考えは残してもらいたいなという気持ちがある。湯布院の中における緊急病院にしてもここしかない、リハビリにしても利用しているのはここしかない。体育館・プールがとだんだん縮小されていくんじゃないか、最数的にはなくなるんじゃないかという不安をやっぱり市民の一員としては思っています。

(委員②)

私の意見としては残してほしいという反面、前回の時にもでました救急病院とプールのどちらを取るのかと言ったら、必然的に救急のほうを大事にしてほしいという思いもあります。しいて言えば、救急病院を残すためだということであればもうやむを得ないのかなと、二者択一にしろということになればやむを得ないのかなという思いであります。

(委員③)

ここに来ないと体力づくりはできません。やっぱり残してほしいです。体力づくりは本当にいいですね、1時間入りますので。

(委員④)

湯布院町民また由布市民あるいは玖珠町、九重町民も力を合わせて、県なり国なりに支援を国にしてくださいという陳情を皆でやるというかたちも考えられると思うんですよね。

また事務長さんが僅かな間で人事異動で転勤されるという話も聞きますし、何とか体質の改善をするのであればキーパーソンたる事務長さんはやっぱり湯布院町に張り付いて、1年2年のタームじゃなくて、やっぱり5年とか6年で真剣にやっぱり湯布院のことを考えながら病院のことを考えて是非頑張っていたきたいなど。少しずつでも延ばしながら考えていっていただきたいというのがということで、経営対策というのは難しいでしょうけどあとは院長と病院のスタッフの方の力に頼るしか自分達市民はやりようがないので是非お願いしたいところです。

(委員⑤)

今日の昼間、院長先生に市民5,000名を超える署名をお持ちしまして確認をいただいたわけです。いろいろとれる方策といいますか可能な限り努力をさせていただいて、市としてはとにかく事業を継続していただきたいということをお願いするだけです。

(根橋院長)

私どもでできるものであればと、当然ながら思っているんですけどはたしてそれが可能であるかどうかというのは如何なものでしょうか。してほしいという気持ちは私もありますけども、でもできるかできないかの問題はやっぱり現実の問題なので、安定してやるということはどうやってもできないんです。

(委員⑥)

存続に賛成をしたいんだけども、赤字だというのはやっぱり大変なんだなという気はします。

皆の力で進むのならもうちょっと時間があるなど、ただJCHOさんはそこまでもう早くしなさいということが来ているのだろうかという気がするんです。

あの赤字は凄いです、個人病院だったら即つぶれます。

(委員⑦)

3年のその短い期間の中で結論を出さざるを得ないという本部の事情というものの御察しする部分あるんですけど、この町民の市民のそうした熱望というものも、院長はその板挟みになって大変苦しい立場にあるんじゃないかということ心中を御察しますが、当分のスパンの中でもうちょっと知恵を皆で出し合ったらどうかなというのが私の今の気持ちです。

当分というもまた何年かということになるでしょうけど、その間にまたこういう思いを本部のほうにも伝えていただいて、知恵を出し合っていける時間がそれこそほしいなと思います。一時閉鎖ともう言うてしまうのではなくて、休館というかたちでどうでしょかというのが私の思いです。

(委員⑥)

新聞にも載ったらしですね、何でマスコミがそんなに騒ぐんですか、それがよくわからない。

(委員⑧)

方策を利用する方々もやっぱり考えていかなくちゃいけない。

1回幾らというかたちではなくて、年会費で1人が幾らというかたちで、それで払うと今度に行く度に払わなくても良いんですよと、その代り利用しない方がいたとしてもその1万円なら1万円というお金が運営に使えるというかたちがありますから、5,000人の方のうちその1,000人が例えば、いいよと自分が利用するのなら1万円だけ出すよという話になれば1千万円ですから赤字も半分になると、そこにまた、行政も苦しいんですけど、それを利用するための例えはコミュニティバスとかそういうことを利用して、またやれますよ。だから体力を回復した時にまたずっと再開ができるような休館というかたちが一番良いのではないかなと、

(委員⑧)

永遠に閉鎖じゃなくて、またそういう時期には余力がある時には始めるまたはそこを利用する利用者の方々もここまでは、非常に使いたいという方が増えてくればどういふふうにするかと考えていくかたちじゃないと、今続けてくださいというのはなかなか難しい、僕は院長先生に言うのはなかなか難しいかなと思います。

(根橋院長)

ものを止めるということが、いろんなかたちでその全て巻き込んで止めるということではないということは申し上げておきたいと思います。その中でまずとにかく確実に守って

何が何でも継続していかなきゃいけない部分もあります。皆様が思っておられるよりは非常に厳しい状況に経営的にあることは残念ながら間違ありません。本当に厳しい状況ですけどここで職員がしっかり頑張っ、関係者皆で一緒に頑張っ仕事をして住民の方と行政の方とまたそれ以外のいろんな組織の方々やっしていけば、必ず何十年も地域で貢献できていく病院であり続けるというふうに確信しております。

ただ、そのためには今非情な決断をせざるを得ないということです。それともう1つそういう意味で言うと止めるということではなくて、これから継続して尚且つできることで更にやらなきゃいけないことを、これからドンドンまたやるということでおりますのでそういう病院であるということをご理解いただきたいと思ひます。

それから時間の問題についてですが、私ももできる限りの時間を使って十分なご説明とご理解をいただき、結果を出したいという気持ちは重々持っております。ただいろんな情勢で経営の状況というのは変わります。

できるだけ時間をかけてということは重々承知しているんですけど、ただ時間をかけるということはそれだけハッキリ言うと赤字が確実に積みあがっていくということも事実ですので、ご理解いただく努力を続けながらもできる限り必要なことをやっていきたいというのが私の考えです。

管理者の院長としてはやっしていかなければいけないことだというふうに思ひます。なので、この今の状況で本当にご迷惑かけるとかいろんな思いに直接は応じられないということは現実にありますけれども、必ず湯布院病院が皆様にこれから先しっかりと貢献していくことはお約束しますのでそういう思いは、病院長がそういうことを考えてやっしていることは改めてお話ししておきたいと思ひています。

#### (委員⑦)

これはとっぴなことかもしれないんですけど、医療ツーリズムとって健康志向に今あるなかで、非常に外国人の方も日本を訪れる1千万人が2千人だという時代がきている。

そういう旅行者の中にもやっぱり健康志向でやっぱり湯布院に来て、日本に来て健康づくりをしようかとそういう人も出てくるんじゃないかということで、医療ツーリズムということを目にするような昨今ですよ。

そうした中で保養ホームですね、これがどうなるのかということも1つお聞きしようかなと思ひますんですけど、例えば保養ホームを再開して短期の受入をしてここで体を鍛えていただいて帰っていただくというような、そういうシステムということも今後の展望の中で十分考えられることじゃないかなと思ひますよ。

今どうするこうするということの結論は言えないですけど、先ほど言った一時休館ということにしておいて、その間にそういう発想はできないのかなと思ひがします。

その中で保養ホームがどうなのかなということが、今後のどう考えているのかなということもちょっと聞きたいなと思ひたんですけど。

(根橋院長)

保養ホームにつきましては、かなり10年あるいはそれ以上前に運営としてできていたということは私も承知しています。

ただここ数年特に近年になって、利用していただく方が減っている。尚且つ大分県の県民にはご利用いただいてなくてほとんどですね、広島、福岡等の県からご利用いただいているそういう状況でございまして、他でご利用もそれは1つの意味合いがあるという場合もあると思うんですけど、いかんせん経営的に収支が取れないということはハッキリしてまして、私がこちらに赴任する前後にそのへんのところの検討がされていて、私も最大限いろんなかたちで努力をしましたが、閉鎖せざるを得ないというのは残念ながら事実であったし、それは先生がおっしゃるようにいわゆるいろんなツーリズムとかそういうようなことをして活路が見出せないかということは可能性としては確かにあると思います。

最後は経営者の判断になってそれが数字であらわせるものもないものもあるわけですけど、これは間違いなくそういうことができるからやっていたらいいしやっていたほうがいい、しかもそれが間違いないというものがあればそれこそやりたいと思うんですけど、残念ながら私自身の中でそれを構築することはできませんでした。

これから先また情勢が変わってそういうことが考えられたりできるようになるかもしれませんが、ただ今はどうかというと難しいとなれば先ずはそういう方法で当面続けていくというのは難しいとお話しするしかない、勿論いろんな方策も当然ながら可能性としては考えられるんですけど、可能性で考えていくことと実際に手を打てることあるいはやれることというのは相当難しいということでございます。

(委員⑦)

シンクロじゃないですけど、温泉プールでシンクロをやってちょっとPRをするとか、医療とそういう部分でちょっと不謹慎なことがあるかもしれないけど、何かそういうことまでも考えて存続できないのかというのがやっぱり市民の声であろうかと思うんですけど院長が言われることを言えばいかともしがたいとそういうことですね。

(根橋院長)

とにかくここは苦渋の選択ですけどしっかりと経営的にやって、それでそれからこの先何年も湯布院病院が湯布院の地で、湯布院の地自身が何十年もかけて前人の方々の大変な英知と努力で築き上げてきたものにこれから先も湯布院病院は貢献するなり参加したいと思っています。

そういう意味で言うと、それこそ先生が言われているようなことに是非とも貢献するなり参加したいと思っています。

ただ、実際に現実に今何をどういうふうにするかというのは私の頭が足りないのか、それともよく分かりませんが、現実の策として今直ぐ打ち出せるものは何かというと先ずは力をしっかり貯めてその上で皆さんに貢献したいというのが今の時点の現状だと

いうことでございます。

(委員④)

メディカルツーリズムというのは前回も私が言ったんですけど、実際に研究検討をする価値があるものについて、どうして1回調査をして当たってみましょうということを院長の口からお聞きできないのかそれが私は一番不思議なんです。

(根橋院長)

そういうご要望とかお考えが強ければ、何か現実的にできる知恵を拝借できますか。先ほども言いましたけど私の頭の中で考えられることでは少なくとも直ぐ実現できることは残念ながらございません。

別に今お話しされたことにこういう言い方をすると、また何だと、言われるかかもしれませんけどそれが現実なんです。

それを現実を現実でないということは、実は経営者というか管理者としてはむしろ私は間違ってることだと思います。それをお伝えして、それからもう1つは確かにいろんな選択肢があるのは全て可能性を考えてできる人、或は選択ないしは検討していくというのはなかなか難しいということも。

(委員④)

調査、研究するだけはそんなにコストはかからない訳ですよ。メディカルツーリズムだけをたまたま今話をしてますけど、それにしても例えばもうすぐに今はネットの時代で先進地の例を今調べてみましょうと、これは良いこと面白いことをやってるなということであれば、いろんな温泉地で検討はすぐできるんですよ。

(委員⑧)

経営が安定し、そこに戻った時に、または戻りつつある時に、そこに夢であることを研究したり次のことに手を出すというのは非常にできることだと思うんですけど、その時には中のそこにお勤めになっている方々も含めて皆さんが、じゃあ次のことをその時に地域の住民の方々からいろんなアイデアを出していただいたり、うちの病院とかでも考えたんですよインバウンドの人達をどう受け入れるかと、例えば語学も確かにあったり語学ができていた副院長がうちもいなくなったので、彼はスカイプで中国の人と話をして中国の研究室の人間に中国語を英語に訳させてそれを自分が英語で今度は渡してというかたちで、台湾から来た人や全く中国語しか話せない人を診てたんですけど、私はそんなことはできないから、この頃現実としては旅館からご紹介のあった韓国の方であまりしゃべれない方なんですけどといわれたら、すいませんと、その時には逃げ道として湯布院病院さんのほうに行っていたらと逃げてるぐらいですから申し訳ないんですけどね。

それから考えると根橋先生が来られて1年目2年目のこのやっぱり震災のことがあって

今大出血をしている時になかなか夢のあることを考えるんじゃなくて、ふらふらしてるのを元の状況に戻す、体力が元に戻るということを先ず考える。

そのためには、わるいところはやっぱりできるだけ処置をするということになると思うんですね。そうなった時にもしそれが来年なのか再来年なのかそれは分かりませんが、その時に根橋先生あの時にこういう話をしましたよねと、じゃあ余力がでたところでまたお願いしますよという話は私は重々お願いして。やっぱり大分県の強みは温泉なんですという話になっていくらかそういうことで、また竹田の長湯とかとも手を組んでやりましょうということになれば、その時は中心になっていただいてやっていただくのは凄く夢があるし必要があるかなと思うんですけど、ここ数年のことからいうとやっぱり赤字転化したときにはやっぱり。

(委員④)

ちょっと話をさえぎってわるいですけど、別にそれを今すぐやんなさいというとかではなくて、1つはその姿勢です。結局、頭からもう感性を否定しながら前へ進むというんじゃない助かる命も助からないです。だからそれを言ってるだけでね、例えば会員制をしたらどうかという提案にも、それを皆で検討、もしあれだったら市民の側で検討してもいいし、そんな可能性のある部分についてはやっぱり実際に動いてみないと、その結果もう無理だったらしなければいい話で、だからってそこに病院に赤字を累積するような原因が起こるわけじゃないし、例えば今市民が心配をしているのは、外来に行ったけど診療に行ったけど看護師さんの顔写真がドンドン減ってるわと、あぁあの先生がいたのにいなくなったわという心配も“げんき”が無くなるということと重複して心配に思われている訳ですよ。

だから患者さんにしてみたら、医療サービスの低下ということは当然やっぱりその先行きの不安というのは増幅するわけですから、そのへんも例えば直ぐにできる手としては、これは病院関係がどうなっているか分かりませんが、地域医療を考えた時には例えば大分大学と提携をしながら医療サービスの充実を図る手段を高じるとか何かそんな積極的な姿勢がちょっとでも見えれば、あぁ頑張ってるんだな院長はとって安心するんですけど、それがなかなか町の人には伝わってこないんで、おそらく5,000人という署名の数になっていると思うんです。

その辺を理解して、だから今直ぐこれをやらないからわるいとかと言ってるわけじゃないんです。1つはそういう姿勢の部分、感性の部分をちょっと考えてくださいよと、それで市民は安心するんですよということを分かっていたかないと、もうどうしようもないですね。

(根橋院長)

それはもう重々私は感じております。この場でもお話ししてますし、たった今も宣言させていただきました。それはそれこそ住民の方々と一緒に頑張っていくという私の言葉を信じていただきたいと思います。

(委員⑥)

話が戻るんですけど、もし休館にした場合は維持費は結構かかるんですか。

(根橋院長)

維持費はそれなりにかかりますけれど、実際にやるとしたら。

(委員⑥)

人件費がかなりですかね。

(根橋院長)

仮に再開するとしたら、その再開の時に一定の経費がかかることは間違いありません。

ただ、仮に先ほどもお話しが皆様から出ているように病院の全体の収支が改善して軌道にのって、尚且つその中でどんなご意見とかこちらの考えとかを検討しながら現実これだったらいけそうだという方策が見つかって、尚且つその再開するためのコストを考えてもできるということになれば、勿論それは有り得ると思います。

(委員⑥)

休館した時のメンテナンス費用がかかるじゃないですか、それはやっぱり無理ですか。それも無理。

(根橋院長)

最初から例えば、どのくらいの間で再開するというような前提でそのメンテナンスをするというのは厳しいんです。だけど物理的に閉鎖してそれを再開できないものではないということは、別に建物を壊してしまうわけではないですから。

(委員⑥)

保養ホームの時は、かなり大きな理由として耐震構造がといわれたんです。プールなんかはどうなんですかそういう面では問題ないんですか、体育館も耐震構造なんですか。

(根橋院長)

プールのほうは今のところ問題ないと思っていますけど、ただ体育館はかなり古い建物なので長期間というのは難しいと思っています。

(委員⑥)

じゃあ休館するという場合は、とそれほど維持費は心配しなくていいということですか。



(根橋院長)

というか基本的にそれを私が口に実際にしてないのは、再開できるという見通しがもう既にあって何年後にやりますという見通しがあれば、皆様に大きな声でこうしますと言えるんですけど、できると言えない事を言うということは不誠実だと。

(委員⑥)

公助か自助でなんとかということもあるのでは。

(根橋院長)

物理的に止めたらもうそれが再度物理的に使えないということではないということは、それは間違いないです。

(委員⑦)

利用者が年々減って高齢化になって他県から来るというふうなことで、いわゆる収支面からと言われたんですけど、保養ホームあり、プールがありそうしての湯布院病院、年金病院ということで全国の安心感というものの信頼感というものも、それであったんじゃないかと思うんですよね。

ただ来なくなったからそれでももう止めますというと、だんだんとそれこそ尻すぼみに、先生が一番心配されておる病院の存立まで脅かせる事態になりはせんかという心配が、我々としてもあるわけなんですよね。

何かそこにただ目先の高齢化、もう来る人が少なくなったというだけでの閉鎖であったのならばちょっと残念だなと思うんですよね、保養ホームがあるということでのやっぱりPR効果というかそういうのが十分にあり、地元湯布院ともマッチングした施設である、病院であるということでのネームバリューというのは私は凄かったものがあるんじゃないかと思うんですよね。

それがなくなりまたプールがなくなってくると、いよいよ病院自体が一番建て直さにかいかん、病院までいってしまうんじゃないかというのが率直な私の今の思いもするわけですよ。だけど、院長が言われるように絶対にこれはどうにもならんのだと言われれば我々としては言いようがないですよ。

(根橋院長)

それでしっかりと仕事をさせてもらって、必ず何十年もこの地で貢献できるようにしていくことそれについては私はお約束します。そのためにやっていきたいと思っています。

先生はずっとこの地で活躍されているので、特に今までのそのやってきたことについていろいろなお考えとか思いがあるのは重々理解できるんですけど、ただ本当に世の中この十年、二十年、三十年前と、仮に私が医者になった頃に立ち返ってみると全く違う世の中で、全く違う医療で、全く違う考え方をしてやってきました。

今言っていることなんてどういうことだとその時に言われたら理解できないできなかったことで、それを現実に取り組まなきゃならなくていろいろでてきているので、そういうことも含めてとにかく最終的な私の役割はこの地でしっかりとしたサービス、医療、医療に関わるということを提供していくことですので、しぼんでいくんじゃなくて、これら今以上に、特にお年寄りが増えてくる、若い人が減っているということで余力があるところで仕事ができる場所はどこの組織もないので、そういう意味ではうちもしっかりととにかく仕事をしてそれで必要な仕事をやっていきたいと思っています。

そういうことについては是非ともご理解いただきたいなと思っています。今回のことについて分かったのは、皆様の非常に強い思いと期待とか要望があることは改めて承知いたしましたし、前の話に戻りますと5,000名を超える署名をいただいたということも確かでございます。それを我々の病院としてどうしていくかと言ったら、必ずこの病院をしっかり維持して尚且つ貢献を、更に今まで以上に貢献していくということをお約束するということをご理解いただきたいと思います。

(委員⑦)

結局閉鎖ということで打ち出すのかそれとも休館でいくのか、そこしか今のところないかと思うんですが、そのへんはどうですか。

(根橋院長)

言葉の選び方は私も。

(委員⑦)

院長としてはそれなら休館はできないということですよ。

(根橋院長)

休館というか、再開できるものだったら再開したいという気持ちは勿論あります、それは、だけどその見通しが無いというところでどうだという、先生がおっしゃっていることは良く分かります。

ただ逆にその確実な見通しが無い中で、その物言いするということはどうかなということとは私の病院長の立場で思います。

(委員⑥)

市民の感情がぜんぜん違うと思うんですよ休館というのと閉館しますとでは、受け取り方が。

(委員①)

年金ホームはどういう扱いになってるんですか、保養ホームはあれは廃止ですか。

(根橋院長)

閉鎖して今は使う予定がないです。

(細田事務部長)

閉鎖になっています、確かに閉鎖になっていまして。

(委員⑦)

それが3つあって玉造が生きているというから、とにかく保養ホームは全部全国のを閉鎖するんだということで、おまけに地震も来るからという事で、ああそうですかということとで帰ったんですけど、そしたら玉造はやるとか言うしね。

(細田事務部長)

玉造はですね全体で黒字でそういうのもあって、私は実はその湯河原の病院で健康増進ホームを、ちょうどこちらと同じ歩みでそういうのがありました。元々は厚生年金保養ホームというかたちで、中途半端な存在でした。当時県外のお客さんとかを泊めて、湯河原は旅館組合に入らないとかいけないとかそういう問題もいろいろございました。それでJCHOに移行した時に実は独法としてその生き残るとか、存続するというのが病院、看護学校、老健施設で、保養ホームというのはなかったんですね、認められなかったんです。

それで、病院の付属施設というかたちの湯布院病院附属健康増進ホームというかたちでいわゆる形態がもう変わらざるを得ない、3食で健康に配した食事とかそういうかたちの運営の仕方になってもう変更されてしまったというところで、湯布院、湯河原というところがやはりどうしても赤字といたしますか、利用者の方も減りまして赤字になって、申し上げにくいんですけど今回みたいなかたちでやっぱり病院本体の経営がどうというかたちになりました。玉造は全体的に黒字を維持しましたのでもう少し様子を見るということになりました。

(委員④)

いいですか、ただ保養ホームの閉鎖の時にねこれはもうその時は言わなかったんですけども、若干のあらましの数字は出てきました。で赤字になっているのは結局、減価償却費まで全部計上して、オーバーフローを考えた時にはそんなに閉鎖するほどの赤字じゃなかったんですね。

(細田事務部長)

すいませんお言葉を返すようで申し訳ないんですが、減価償却費というのは当然企業の損益を考える場合必要なものでございまして、実はこれは私も厚生年金時代には例えばこの建物をですねこれは国の建物で減価償却は必要なかったんですが、でも民間の病院さんとか全部それは当然この減価償却を含めての利益ですから、だからJCHOに移行して減

償却費がかかるようになってから、これが本当の損益だと思いましたですね改めて、その額は結構やっぱり減償却費が大きかったです。

本当に厚生年金時代は今思えば、周りから言われたことはあったんですけど甘かったと思います。先生方も経営されているから、当然それを含めての計算ですから。

(委員①)

私がホームをどうするかと聞いたのは、やっぱりホームもなくなって体育館もプールもなくなって、だんだんこう1つの流れみたいなものを言われたんですよ。

例えば今こっちが言われたように、ホームのほうを例えば委託業務みたいなかたちでどこかの会社に委託して、入院患者とか病院に通う人のみを泊めるような施設として、委託業者を見つけるとか、そうすれば、それは私が単純に考えただけですからいいのかわるいのかわかりませんそれが医療的にですね、そしたらここも患者が増えるあそこは委託だから一切ここから支払わなくていいというような、土地の借り代がこっちに入ってくるとまい具合にはいってるんですけどね、そういう方策をどうなのかなと思って。

(委員③)

私は難しいことは分かりませんが、プールを利用しているものとしましては保養ホームがある時は、もの凄くいっぱい日本中からという大きいんですけど、もう遠いところから来ていてそして友達になって、どこから来たんですかというところとどこですということ、そして帰りにはお土産をいっぱい買って帰りますから湯布院が潤いますよということと言われて保養ホームっていいなと思って、遠くの友達ができるので楽しいなというようなことで、もうその難しいお金とか何とかいうことは分かりませんが、とても楽しかったんです。

それがなくなって、朝午前中はもう地元の人達だけで本当に少ないんですよ、で午後から患者さんが入りますので結構多くなりますけど、やっぱりプールの利用者はね保養ホームがもう大きかったですよ、で私達は、利用するほうは非常に楽しかったです。

で湯布院も潤ったと思います、たいがいお土産を買って帰りますから、良かったと思いますよ。

(委員①)

私も旅館組合とのマッチングの関係でいえば、そういうここを利用する入院とか治療に来る人それから入院患者の付き添いに来る人というのは、旅館組合とそうトラブルになるようなことじゃないんじゃないかと、例えばあそこをビジネスホテル風に変えてしまったらそれは旅館組合と当然大事になる可能性はあると思うんです。

(根橋院長)

いろんなかたちでその外の環境あるいは中の会計の問題も変わってくると、同じように

いかないということがあって、逆に仮にそのホームが今運営していたとして、おっしゃるよういろんな起死回生の一手が必ず打てるとは限らないので、打てなかったとしたら今はもうどうなってるかということだと思います。

(委員⑦)

休館はちょっともう先の見通しが立たないから、そういうことも打ち出せないということになれば、例えば院長がいう経営状態がプラス2千万円になったら再開しますと、そのへんまでのことは言えるんですか。

(根橋院長)

それは先生、そういう物言いは。

(委員⑦)

大変だと思いますけど。

(根橋院長)

いや申し訳ないけど、もしそういう答えを出すとしたらそれは責任ある管理者と私は言えないと思っています。

(根橋院長)

私もそういうことが言えれば良いたいという気持ちはありますけど、それと言うということは同じじゃないということは。

(委員⑦)

勿論ね、2年先に2千万円プラスにしるとか3年先に4千万円プラスにしろということ言ってるんじゃないですよ、病院が黒字改革になった時には再開しますよぐらいのことは言ってほしいというのが私の気持ちです。

私もお世話になってるし、家内もお世話になってるし、親父はここで看取っていただいたし皆好きなんですよ湯布院病院を愛してるんですよ、こういう流れのなかで湯布院病院が、何かこう尻すぼみになっていく、そういうものを我々が感じ取るものだから。

(委員④)

市民、具体的な作業とバックアップをやる気になればしようと思っただけですからね、そのへんの決断はやっぱりしてもらわないと。自分達ももう言葉だけの応援になってしまいます。

(根橋院長)

皆様方の思いと期待とご要望をできる限りしっかりと真摯に受け止めて、これからちゃんと貢献していきたいということです。

ですから、病院の経営が改善して尚且つ一定のものが出てくるかどうかというのがその管理者とか経営者が常に考えなきゃいけないことですので、2千万円でまただからというようなことができないという意味で私は言っているの、最初からもうそういうようなことを、私がしたいことはこの地域に貢献したいことですから、その貢献ができることだったらできることはどんなことでもしていきたいというのが私の方針ですから。そういう意味では皆様先生の言うておられることに対してお応えしていきたいという思いは非常に強いものを持っています。

(委員⑥)

具体的数字はダメでしょうけど、ある程度の経営状態になったら必ず再開しますとか、そういう決意表明だけでもいただければありがたいんですが、具体的な数字は無理ですかそうすれば皆んな納得するんじゃないかと思いますが、湯布院病院さんが大変なのは分かっていますし。

(委員⑦)

院長先生も苦しい立場にあるということは十分わかっております。また、そういう組織の中でのJCHO湯布院病院の院長であるという立場も我々は十分理解しておりますけれど、何んとか我々の思いというものも院長に受け止めていただいたと思うので、数字はこちらに置いていても、何んとか立て直しがきいて、ならば皆さんの期待に沿うプールの再開、体育館の再開をしましょうというふうに受け止めていいんでしょうか。

(根橋院長)

私の思いは、先生と同じです。

(委員⑦)

分かりました。他の委員さん、何かアドバイスはないでしょうか。

(委員⑨)

地域医療構想ですね今、急性期から超急性期の例示ごとにですね病床の改変というかそれを国をトップに考えているんですけども、それを考えた時にやっぱり湯布院町をみたときにやっぱり高齢化も進んできますし、在宅医療とかを湯布院病院さんが今後中心に重点的にやっていると、回復期リハもやって早く麻痺とかを回復させようという、昔はそれをメインとしてやっていた病院ですよ、それがだんだん少しずつ弱くなってきているというそこを一気に元のかたちで、骨格をしっかりしたうえで在宅とかも少し、また救急とか

をするのに、やっぱり実際にそこまでは余力がないと思うんです。

そういうところはやっぱり基幹病院がバックアップをしてくれないと実際にはできないし、在宅をやるにしてもいざ悪くなった時に引き受けてもらうというところはやっぱりここになると思うんです。

そういう意味で、ここが少しプールとかを止めて休館したとしても、その骨格をしっかり湯布院病院さんが持ってくれないと、下手するとそのままずるずるいってしまう可能性は十分今後あると思うんですね。

その時に皆さん本当に高齢化になって在宅で困ってる時に役にたてるのは、この湯布院病院さんを、今プールは仮に目をつぶったとしても、その骨格ができておけばまた別のかたちで皆さんのお役にたてる病院になるんじゃないかと思います。

国はやっぱりそれをもう考えていますので、今後、保険の診療とかそっちの方向に動いていくのは分かってますから、病院をやる側としたらそれに乗らないと存続が難しくなってくると、それが現実の話じゃないかなと思います。

県としてどっちが良いとは言えませんが、今の流れとしたら湯布院病院さんの苦渋の選択というのは、先ずそこをやらないことには生き残っていけないという時代にはなってくると思うんです。

やっぱり今後、湯布院でも必要になってくるのはそこだと思います。今はまだいいでしょうけど、それを医大とか別府の病院がそこらがやれるかというところちょっと遠いですしダメじゃないかなという気がします。

だからこの基幹はやっぱり残しておかないと、災害の時なんかは今回もそうですけども、そうなるとここがしっかりしてないと地域の医療というのは崩壊してしまう可能性があるんじゃないかという気がします。

だからそれは本当に苦渋の選択じゃないかと思いますけどね、できればその温泉というカラーを出して、それこそ健康寿命日本一を大分県は目指してますから温泉県大分ともいっていますので、そこが併せてやればいいんですが現実的に別府もツーリズムをやろうとしていましたけれどもなかなかそれだけのニーズがないというのが現実で、健診センターとかも全国から呼んで健診をしようとしたけどなかなかそういうニーズはあまり無いんですね。

採算が取れるかというところ、そういうものは現実的には非常に厳しいと現実的にいくとやっぱり、今後は高齢化に向けた在宅とかそちらへ力を、リハビリも本当の回復期のリハビリをもう1回きちんと作るというのが大事じゃないかなと、これは県としての意見じゃなくて個人的な意見ですけども。

#### (委員⑥)

そういう意味で本当に頼りにしてますんで先生、以前に由布市でインフルエンザの病床が40床必要だったんですが、〇〇先生が前々院長ぐらいに頼みに来たらNOと言われたんです。1病棟40床でそれでもまあ一応インフルエンザの緊急の病床に指定させてくれと

それをNOと言われて困って、うちに来てしょうがないからうちが20床を受けるので他の病院が受けるんだから湯布院病院さんも受けてくださいと言って20床受けてくれたんですよ。

そういうのはやっぱり積極的に医師会との連携も今後もよろしくお願いします。そうせんとなかなかなんもかんも、なんかこうやって住民の方と湯布院病院さんの間になかなか微妙な、病院の立場からすればそれはもう経営者の立場からすれば本当に湯布院病院さんのことは分かるんですけど、もうちょっと医師会とも密な関係を作っていただければありがたいかと、なんなら40床を今度はもらってください。

新型インフルエンザの分を私が20床持ってますから。

(根橋院長)

時間のこともあると思いますので、ここで一言申し上げたいと思います。

前回の協議会もそうですし、本日の協議会もそうですけれども皆様方のいろいろなご意見とかご要望をしっかりと湯布院病院は受け止めております。で、必ずこの地域に貢献して行くことをお約束します。

そのうえで最終的には、この病院の管理者である院長のほうに下駄を預けていただきたいというふうに存じます。

繰り返しますけれど、この病院が地域に今まで以上にしっかりと貢献していくということはここで約束させていただきます。それはもう間違いなく約束させていただきます。

いかがでしょうか。

(委員⑦)

頑張ってください、それしか言いようがありません。我々も協力します。

(根橋院長)

ありがとうございます。

いろんなご意見、ご要望もあると思いますけれど、繰り返しになりますけど湯布院病院はしっかり仕事をさせていただきます。よろしくお願いします。

(委員④)

発表は何時頃する予定ですか、それだけ聞きたいんですが。

(根橋院長)

今日こういう話があるので、何時ということは今決めておりません。

ただ、皆様方に時期について本格的に話しになった場合にはご連絡申し上げます。今日の時点で、今日ここで何月何日ということは申し上げません。よろしいでしょうか。



(委員①)

検討をどうかたちでやるか、当面検討していくというかたちでよろしいですか。

院長先生の考えはこれに向けて行くんだけど、この間さっきいった時間がほしいとかいろんなことがあるから、検討していくという時間でよろしいという考え方で、なるならなはいは別の問題ですから。

この今日の会議の結論から言えば、この間、院長先生も私達もいろんな知恵を考えながら、院長先生もしっかり考えていくと、方針としてはもう院長先生が出されているから、これを覆すとかどうのこうのという意味じゃなくて、やっぱり院長先生にも考えてもらえるということで私達が受け止めてよろしいでしょうか。

(根橋院長)

それでよろしくお願いします。

(委員①)

はい、分かりました。

(委員⑧)

そういう意味では、本当にここは存続して地域医療に貢献していただくということで考えると、ずっと残って頑張っていたくには今回のことは院長先生のご決断していただくしかないと思います。

皆様のご意見は非常にありがたいですし、さっき言った会員制度もまた皆がそれで補填をするよと、住民の方々がですよそういうかたちになれば、少し話は違ってくるかもしれない。

(根橋院長)

どうもありがとうございました。

〈 了 〉